

平成30年度地域文化学専攻・比較文化学専攻学生派遣事業研究成果レポート  
新海拓郎

1. 事業実施の目的  
博士論文執筆のための調査・研究活動
2. 実施場所  
熊本県玉名郡長洲町
3. 実施期日  
平成30年10月17日（水）より同月23日（火）まで
4. 成果報告

●事業の概要

本調査においては主に以下の3点について調査を行った。①「未来へ輝け！金魚サミット in ながす ～金魚を活かしたまちづくり～」(以下、金魚サミットとする)の聴講、②第31回金魚と鯉の郷まつり・第50回金魚品評会(以下、金魚と鯉の郷まつり・品評会とする)の視察、長洲町内に点在する養魚場での聞き取り調査。10月20日開催の金魚サミット、10月21日開催の金魚と鯉の郷まつり・品評会を中心に、その前後の日程で養魚場を訪問した。

1) 金魚サミット

金魚サミットでは新品種「ながす羽衣琉金」作出に関する長洲小学校による事例発表、太田黒浩一氏による基調講演、金魚産地の関係者によるパネルディスカッション、深堀隆介氏によるライブペインティングが行われた。事例発表ではながす羽衣琉金の作出過程が詳細に紹介された。また、パネルディスカッションにおいては日本を代表する金魚産地である熊本県長洲町・奈良県大和郡山市・愛知県弥富市・東京都より行政・生産者・販売者が集まり「金魚を活かしたまちづくり」をテーマとした議論が行われた(コーディネーター:総務省地域力創造アドバイザー 今泉重敏氏(株式会社 まちづくり研究所 代表取締役)、パネリスト:長洲町養魚組合 松井組合長、愛知県弥富金魚漁業協同組合 伊藤組合長、奈良県郡山金魚漁業協同組合 東川組合長、金魚坂 専務取締役 柳生氏)。

2) 金魚と鯉の郷まつり・金魚品評会

第31回金魚の郷まつりおよび第50回金魚品評会は金魚と鯉の郷広場にて同時開催されている。金魚と鯉の郷まつりでは、物産市・造船工場バスツアー・交通安全トライアルショーなどの物品販売と催し物が行われた。また、町内の金魚生産者・金魚販売者がブースを出店して金魚即売会が行われた。そこでは、各養魚場で生産された金魚・錦鯉・変わりメダカが販売されていた。また、金魚すくいやメダカすくいを行うブームもあった。

同会場にて開催された金魚品評会では熊本県内外から集まった金魚生産者や愛好家79人が322匹の金魚を出陳し、審査員による厳正なる審査が行われた。出陳された数多くの金魚は会場を訪れた人々の目を楽しませていた。

### 3) 長洲町内の金魚業者での調査

10月18-19日に長洲町内の現地調査および養魚場・小売店3か所を訪問した。10月18日に養魚場①にて金魚の振れ売りに関するインタビューを行った。10月19日には長洲町内の金魚関連施設（金魚の館・養魚場②・競売場・金魚の養殖池など）を視察するとともに、小売店①にて金魚の流通などについての聞き取りを行うことができた。

10月22日-23日には養魚場・小売店など5軒を訪問した。養魚場③・④・⑤において養魚施設の視察をするとともに、金魚の養殖の方法などについて聞き取り調査を行った。また、小売店②にて錦鯉の養殖法についての簡単な聞き取りを行った。ほかに、養魚場⑦において古老から往時の金魚養殖についてのインタビューを行った。

その他に、長洲町役場および長洲町立図書館において長洲の金魚に関する文献や映像資料の収集を行った。

以上のように、調査期間中の4日間を利用して、長洲町内における金魚の養魚場などを訪問し、生産業者などから長洲町の金魚養殖について、その技術・養殖施設・流通などの様々な要素について調査することができた。

#### ●本事業の実施によって得られた成果

調査者が博士論文執筆のために調査を行っている大和郡山の金魚産地としての特異性を明瞭化させることができた。まず、金魚サミットにおいては各金魚産地の特色と今後の課題にかんしての議論が行われ、観賞魚産業というものの特殊性とそれによる問題点というものが明らかになった。このような議論は今後、大和郡山の金魚養殖を研究していくうえでの重要な視角として位置付けられる。他に、金魚と鯉の郷まつり・金魚品評会では長洲町の金魚養殖業者および全国の金魚関係者と繋がることができた。さらに、長洲の養魚場の視察や聞き取り調査では大和郡山とは大きく異なる養殖の方式が確認された。

大和郡山と長洲はどちらも金魚産地として名高いが、その産地形成の系譜は全く異なる。大和郡山における金魚養殖は享保9年(1724年)に郡山城に入城した柳澤吉里が甲斐国から金魚を持ち込んだことが由来とされている。その後、藩士の副業として金魚養殖がおこなわれ、明治期に農家の副業として金魚養殖が展開した。また、大和平野に数多く点在する農業用ため池に発生するミジンコ類などの動物プランクトンが金魚の稚魚の初期餌料として好適であったことが挙げられる。長洲でいつから金魚養殖が始まったのかは定かではないものの、寛永・正保・慶安年間(1624-1652)の細川家奉書の中に金魚の記録が残るが、大量生産が開始されたのは明治時代のことである。寺本末吉(1859-?)は明治10年に庭に素掘りの池を掘って養殖を始めた。当初は初期餌料にゆで卵の黄身を利用していたが、町内のジェーナギ池に繁殖するミジンコを利用したことで大量生産に成功した。大正末期に長洲独特の珍種の開発に着手し、オランダ獅子頭をもとに改良したジャンボ獅子頭を生み出した。

このように、大和郡山と長洲は異なる歴史的背景のもとにそれぞれが独立して金魚産地として発展してきた。

長洲と大和郡山では養魚池の形態、使用される道具、養殖法などの点において、大和郡山との類似点および相違点が明らかになった（表1）。このような差異は産地の特長を捉える上で重要な視点となる。とりわけ大きな違いは長洲と大和郡山では立地（沿海部と内陸部）と生産する品種が異なることである。大和郡山はその地形的特徴から雨が少ない地域であり、厳しい水利慣行が存在し水が貴重な存在である。一方、長洲では海に近いことから塩害の影響を受けることもあったという。また、金魚すくいに使われる金魚の種類が長洲では全国と大きく異なる。長洲では一般にマルモノと呼ばれる琉金や出目金などの金魚のみが使われ、全国で一般的に使われる和金は使われない。どちらの地域でも金魚すくい用の金魚が生産されているが、その性格は大きく異なるのである。このような差異を比較することによって大和郡山の持つ産地としての特異性について明らかにすることができる。

表1. 長洲と大和郡山の比較

	長洲	大和郡山
立地	沿岸部	内陸部（盆地）
主な生産品種	マルモノ、すくい金魚	和金、すくい金魚
金魚すくいに用いられる品種	マルモノのみ	和金+マルモノ
養魚池の形態	金魚池	金魚池、ため池
池の底質	砂地	泥
産卵藻	人工藻	ヒカゲノカズラ
初期餌料	ミジンコ	ミジンコ・ゆで卵の黄身

●本事業について

本事業により経費を援助していただいたお陰で、金魚サミットへの参加および長洲での調査を執り行うことができた。今回の調査によって俯瞰的に大和郡山の金魚養殖について捉えることができ、博士論文の執筆のための大きな一助となった。本事業を認可していただいたことに感佩の意を表するとともに、専攻の先生方および担当者に御礼申し上げます。

●参考

- ・長洲町史編纂委員会編（1987）『長洲町史』，長洲町
- ・長洲町公式ホームページ（2018年11月20日最終閲覧）

<https://www.town.nagasu.lg.jp/kiji0035150/index.html>

<https://www.town.nagasu.lg.jp/kankou/kiji0035149/index.html>